

**<卒論コメント1>**

まず要旨がなかなか良く書けている。テーマをめぐり、第1章が背景、第2章が制度、第3章が事例（現地調査）を取り扱ったと理解できる。

第1章において、確かに人の移動は資金の移動と伴う（5頁）からこそ、観光は経済的にも注目されるとの理由に納得した。観光産業の質が量から質へ変容してきたこともわかった。しかし、関係の文献・資料によく当たってはいるものの、どうも官製説明の後追いといった印象は避けられなかった。たとえば、せっかく市町村・観光協会の観光計画に言及しているのだから、たとえ電子媒体であっても、雪国観光圏以外のいくつかの市町村を抽出して各々の観光振興の特徴を探ってほしかった。

第2章において、観光品質認証制度が、一定のインバウンド効果をもたらしていることが良く理解できた。11頁から12頁にかけての記述が切れているせいか、第4節の評価事業のところ、何が言いたかったのかがぼやけてしまった。ページ数をかせいでいるのではとさえ思ってしまった。単なる評価事業の紹介・羅列ではなく、評価から見えてきたことは何なのか、また、「おもてなし」評価の基準についての提案や、自由記述欄の具体的な中身などを追求してほしかった。

第3章第3節の聞き取り調査は、昨年末に近い、卒論提出の切羽詰まった時期であったものの、いやぎりぎりの時期であったころからこそなのだろうか、充実した内容の回答を引き出せたように思われる。自らが開拓したオリジナルな内容の点でも資料的価値があり、本論文の要諦箇所となっている。奮闘する観光地自治体の姿が浮かび上がってくる。しかし、本当に「運の良さ」（35頁）だけなのだろうか。他の知見は得られなかったのか。制度をうまく活用する人の存在が大きかったのではないか。また、別の関係者への聞き取りを実施してほしかった。

まとめについても真摯な考察は継続している。しかしたとえば、各観光地の観光客誘致戦略の力量が増し、当地の魅力が向上していけば、異なる観光地間の競合が避けられなくなり、そうなった場合の解決策はあるのだろうか。今後10年後、20年後に観光地は変わらないのか、あるいはどう変容していくのかといった記述もぜひ読みたかった。

**<卒論コメント2>**

いきなり形式面の指摘で恐縮だが、横書きで背表紙が右側にあり読みにくいし、このような目次にも初めてお目にかかった。せめて、「1. 2. 3. …」としなければ。

「日中長期貿易協議」についての問題意識の強さが伝わってくる。ただ一方で、当たった文献が少な過ぎるのではという思いもした。読み手には、書籍の内容をそのままなぞり、合間に素朴な感想を挿入していると映る。

書き下ろしのスタイルを取っているが、そのわりにはカギ括弧の引用が多く、各々の出典が記されていない。

またたとえば、「筆者考察」（14頁）とあるが、「財界首脳がいかにかこの問題を大切にかんがえていたのか」を指摘するだけ考察といえるのか。

やはり対象とした個々の文献を位置づけていないのはまずい。終始一貫感想文のような記述となってしまうている。

### <卒論コメント3>

「日本の商業捕鯨再開への手段の考察」(3頁)という論文の目的を達成するために、まず第1章では、「3陣営」(4頁)の反捕鯨運動を取り上げる。インターネット情報を駆使しているが、読んでいて薄っぺらさ・希薄さを感じないのは、対象情報を簡潔に凝縮してまとめているからであろう。5頁など英文HPにも積極的にアプローチしている。反対運動の主張は映画にも反映されているが、これを「感情論」(同頁)と位置づけている。このあたりの賛否は日本国内でもあろうが、違和感を持たずに読み進められるのは、諸外国も含めて、事実行為を丁寧にまとめているからであろう。

うかつにも反捕鯨運動を行う国内市町村の存在(9頁)を知らなかった。食用か観光用かといった鯨のどこに価値を置き、生活の糧とするかによって、基礎自治体間での摩擦が生じるのだ。大変興味深い事例である。欲をいえば、両者の主張を整理するなどして、この摩擦の事例について掘り下げてほしかった。

第2章でも英文HPに接している意欲は評価できるが、リスク(マクロ、ミクロ、国外)設定の理由と、これがリスク評価を行う上での有用性について、読み手にもっと分量を割いて説得してほしい。テーマにおける事例を当てはめようとするトライする姿勢も評価できる。13頁のリスク評価の図表は、オリジナルであり資料的価値がある。ただし分類・類型化そのものは考察のための手段であり、目的ではないはずだ。

第2節が惜しい。図表から特徴を読み取ろうとする努力は多としたいが、たとえば、社会と政府とにリスクが交錯(妨害活動が社会感情に影響するなど)する事例もあるだろうし、両者間での相互作用、影響力のベクトルを明らかにできなかったらどうか。

第3章のSWOT分析は、まちづくりワーキングなどで経験したことがある。捕鯨政策領域にも当てはめられる射程の広い分析方法だと思った。この章に限らないが、精緻・丁寧な記述が首尾一貫している。

ただし、通読して果たして「かゆいところに手が届いたのか」、疑問に思った。東京の霞ヶ関を含む関係者への聞き取りや現地調査を行えば、論述の展開は違って来たはずだし、ボリュームの物足りなさ感もなくなったはずだ。データ分析は現場での知見を補完するし、その逆もある。両者が相互に補強されて「かゆいところに手が届く」のである。今後の研究の課題としてほしい。